さきもと敏子ものがたり Web 版
紙刷版のうち写真とその説明を省き、ファイル容量の軽いものを作成しました。どうぞご活用下さい。

いのちは何よりも大切です
健康･福祉都市岡山をめざして
日本共産党市議会議員
さきもと敏子ものがたり

略歴

1954 年生まれ、山羊座、ＡＢ型。愛媛県出身。1975 年岡山大学医学部附属看護学校卒業（25 期生）。岡山協立病院で 12 年間看護師として働く。1987 年、市議会議員に初当選。以後４期連続して当選。
現在／市議会保健福祉委員、社会システム調査特別委員会副委員長、日本共産党岡山市議団幹事長。
住所／岡山市旭東町２－２－１０
電話０８６－２７３－９３４７
趣味／民謡、バウンドテニス、アップル文庫活動
家族／夫、２男１女、犬１匹

税の使い方をあらためて
市民の暮らし優先に五つの緊急要求

ムダな大型公共事業をやめさせて、暮らし、福祉優先に税金の使い方を切りかえれば財源は十分にあります。
1、重い医療費、窓口負担軽減の制度化を。
2、乳幼児医療費を就学前まで無料に。
3、値上げが予定されている介護保険の保険料、利用料の負担軽減を。
4、保育士、消防士、教師の増員、市営住宅の増設・改築で雇用の拡大、中小企業への発注拡大を。
5、すべての同和事業は終結を

日本共産党の五議席をなんとしても
さきもと敏子市議会議員

市議会に送っていただいて、四期十六年の月日が流れようとしています。早いもので当時三歳だった次男がもうすぐ二十歳になります。

今期は、日本共産党市議団が三名になり、議会での論戦や政策活動で多忙を極めました。萩原市長のもとで学校給食、児童館の民間委託をはじめ保育料など公共料金の値上げが次々と強行されました。これま

で、市民 と共につくってきた岡山市らしい充実していた制度が「効率化」と財政難を理由に議会のたび毎に削られていくのです。でも、悔し涙を流しながら、粘り強くみなさんと共に市との交渉を重ね、市民の暮らしの事実を示して押し返し、改善提案をして介護保険料、利用料の減免制度などを実現してきました。市政は「道理」の力で動かすことができると確信しています。

今度の選挙で日本共産党の五議席を回復して、市民の暮らしを守る力を大きくしたいと今ほど思う時はありません。どうぞそのためにみなさまのご支援をお願いいたします。

さて私は、看護師出身の議員として「生命は何より大切」を信条として活動を続けてきました。医療制度をはじめ、社会保障制度の改悪がどれほどくらしや生命をおびやかしているかを肌身に感じています。政治をよくしていかなければ生命をまもることができません。二〇二〇年には高齢化率が二十五％になります。安心して老後をむかえ、子育てをするために、社会保障の充実は市民の最も切実な願いです。税金の使い方を無駄な公共事業偏重から、安全なくらし・教育・福祉に大きく変えていく大切な時期です。自分の子育て、介護体験をふまえ、専門職の議員という自覚をもって生命が守れる政治をつくるためがんばりたいと決意しています。憲法をくらしに生かして、健康・福祉都市岡山をつくりましょう。

●みかんの国から岡大看学に

愛媛県喜多郡長浜町のみかん農家（専業）が崎本敏子さんの生家です。三人の子どもの長女として育ちました。みかんの取入れで両親が忙しい頃は、家事の一切をきりもりしていました。みかん農家が忙しい「クリスマス」は子どもが親の苦労をねぎらって親にプレゼントするというのが習慣でした。中学校の頃、カネミ油症事件や森永ヒ素ミルク事件を知り、人の役に立つ仕事をしたいと考え、看護の道を選ぼうと決めました。そして、高校を卒業すると岡山大学医学部附属看護学校に入学しました。学生時代は盛んだった学生自治会の活動に参加し、副会長にも推されました。仲間と一緒にバスケット部をつくったり、医学部の大学祭「鹿田祭」でもすぐれた指導力を発揮したものです。

「命は何より大切」を信条とする崎本さんは、自治会活動を通じ、多くの仲間たちとのふれあいの中で、社会観についてもはっきりとした認識をつかみました。「政治が医療に冷たい」「いのちを何より大切にする政治とは」などを考える中、命を大切にしない自民党政治と真っ向から対決し、たとえその時には自らに不利益にみえても、正しいことは正しいと主張する日本共産党と出会います。十九歳の時です。尊敬する先輩の姿を見て、共産党員として生きていく決意をしました。

●協立病院で看護一筋に十二年

看護学校を卒業と同時に看護師として就職したのは、岡山医療生協の岡山協立病院でした。看護の現場に入って十二年、「患者さんのために」「いのちは何より大切」と一筋に看護の仕事に集中しました。医療生協という組織の中で患者さんや組合員とのふれあいは、崎本さんをひとまわりも、ふたまわりも大きくしました。後輩の育成のために看護教員養成講習に派遣され資格をとりました。病院では病棟婦長という重責にあって、病院幹部からも期待をあつめていた折、病院の先輩（検査技師だった）近藤紗智子市議会議員が県議会議員に転進するのに伴い、後継の市議候補にと白羽の矢が立ちました。

●母と子お年寄りにあたたかい市政を　市議選にチャレンジ

生涯看護師であり続けたいと心に決め、その道まっしぐらだったのに、思わぬ要請に心が揺

れました。一番下の子どもは三歳、子育て真っ最中、義父の介護も必要でした。でも「貴重な女性議員の議席を守りたい。同じように子育てや介護でがんばっている女性の声を届ける議員は必要。政治をよくしなければ命も暮らしも守れない」と自らに言いきかせ転身を決意、一九八七年、岡山市議会議員に立候補して、見事当選しました。崎本さんのスローガンは母と子、お年寄りにあたたかい市政を」でした。崎本さんにとって活動する場所が病院から市議会に変わっただけで、初心をいつも貫き通していくことに変わりはありませんでした。

●地域要求実現や医療福祉の充実に奮闘

市議会一年生議員として、早速崎本さんの活躍が始まりましたが、その年六月議会の初質問が「先取りの福祉行政を！」と、特別養護老人ホームの防火体制充実の要求（直前に特別養護老人ホームの火災がありました)、在宅寝たきり老人への入浴サービス充実を、子どもの安全な遊び場に児童公園をなどでした。続く九月議会でも、いのちを守る行政をと、Ｂ型肝炎のワクチンは公費で、市民病院を利用しやすく、といった具合でした。以来四期十六年の間、白内障眼内レンズ助成、一人暮らし高齢者の緊急通報システム導入、乳幼児医療費無料化拡大、在宅介護手当ての新設、自治体健診の期間延長などいのちと暮らしの住民要求の実現は数限りなく、最近でも、地元旭東消防出張所にこれまでなかった救急車を配置させることに成功しています。また、介護保険制度の制度上の問題点を分析して、改善提案をつづけ、低所得者への保険料、利用料の減額制度も実現できました。はじめから「福祉の崎本さん・医療の崎本さん」といわれるようになりました。

二期目から崎本さんのスローガンは「福祉・健康都市岡山をめざして」となっています。「生活に根をおろした女性ならでは」「さすがは専門家、質問を聞いて勉強させてもらっている」など他会派同僚議員、市当局職員からも言われるほどです。三期目からは、市議会保健福祉委員会委員長をつとめたり、共産党市議団幹事長として、議会内外の交渉ごとや折衝などで大活躍しています。いまでは、質問ぶりも冴えて貫禄十分、「にっこり笑って不正を切る」と恐れられたり、畏敬の的となっています。一九九六年には、北欧諸国を視察。「税金のしくみ、税金の使い方が日本と全く違う。徹底した民主主義と平等主義。日本の国づくりに参考になります」と崎本さんは、行き詰まった日本のこれからにも広い視野で展望を持っています。

崎本さんは、女性議員のネットワークづくりや、市民要求にもとづく幅広い共闘の翼をひろげることにも力を尽くしています。岡山市の女性議員は一致点を大切に共同のとりくみを広げています。女性議員を二十人に増やしたいと崎本さんは考えています。

●市民とのつながりを大切に

議員になって今日まで四期十六年、崎本さんがそのエネルギーの源である市民（支持者はもちろん）とのきずなを大切にするため、議会質問や活動状況を伝えて、欠かさず発行し続けているのが「さきもと敏子市政ニュース」です。かたくななまでに手書きを貫いて、通刊九十号を数えます。独特の文字、レイアウトはすっかりおなじみです。 いまひとつ、市民とのつながりをと開いているのが、なんでも「生活相談」。市議会控え室でも、自宅でも、医療生協（毎週第二、第四木曜日）でも気軽にどうぞと呼びかけています。もうこの十数年、三千件を超えています。みなさんの相談の中に真実があり、それを一緒に解決する道をさぐる中で、勉強でき、活動の糧をもらっています」と崎本さんは、いまも意欲満々です。

●お互いを認め合い夫や子どもと共に

岡山協立病院で看護師として働きはじめた頃崎本さんは、労働組合の活動を通して、当時、市職員労働組合の青年婦人部長をしていた明雄さんと出会いました。そして出会って二年目の

秋、敏子さん（二十二歳）はお互いを認めあえるパートナー明雄さん（二十九歳）と結婚しました。 欲しかった一人目の子どもを妊娠した直後のことです。敏子さんは、風疹とインフルエンザにかかり、一週間高熱を出して寝込み、その後流産……。敏子さんは、その時の悲しみや辛さを忘れることができません。妊娠も、出産もそして、元気で子どもが産まれることも決してあたり前じゃないのだと命の愛おしさを痛感しました。ショックで泣いてばかりいた敏子さんを明雄さんはやさしく支えました。「いのちは何より大切」という信条は、こんな体験にも裏付けられています。

次の子どもの妊娠後も切迫流産で入院をしますがなんとか危機をのりこえ、無事出産した時は、感激して眠ることができなかったといいます。(その長男を抱いているのが右の写真です※この説明は Web 版用に改めました。) こうして二男一女の三人の子どもに恵まれました。

しかし、共働きで核家族の生活は決して楽ではありません。まして三交替勤務の看護師が妻である場合はなおのこと大変です。看護師不足の頃で、育児休暇もなく、敏子さんは院内保育園へ子どもをあずけ、産休明けから働きました。授乳時間になると乳房がはって白衣をぬらすこともありました。保育園へ走ってゆき授乳し、母乳をしぼって冷凍してできるだけ母乳で育てたいと努力しました。「生涯看護師」という敏子さんの言い分を認めた夫は、家事、子育てを全面的に分担してきました。さらに議員活動をはじめてからは、毎日がいわば「二十四時間勤務」ですから、夫や子どもへの負担は一層大きくなりました。夕食と洗濯は夫の役割、朝食と掃除が敏子さんの役割になっているといいます。いろんな苦労を共に乗りこえてきた夫や子どもたち（いまはもうほぼ自立に近い）の存在あってこそ崎本議員の活動があるんだとまわりの人は、みんな納得？しています。夫や子どもたちに感謝しながら「女性も一度きりの人生、あきらめることなしに精一杯生きられたら、『女は家庭、男は仕事』という悪しき慣習は変わっていくと思う。一人一人が自立していることが大切」と崎本さんは考えています。

●どうしても議会に送り出したいと支援の輪が広がっています

年間を通して文字通り私生活などないにひとしい議員生活、でも一人の女性（ひと）であり、妻であり、母であることに変わりありません。そして実は「趣味は」と聞かれると、あるんですねえ。なんと津軽三味線と民謡を七年続けています。二〇〇一年七月に友人とつくったアップル文庫の活動も新しい仲間との出会いを広げています。月一回、自宅の隣の旭東児童センターで絵本を読んだり折り紙などで子どもたちと楽しむボランティアをしています。「三人の子どもたちを育てるのに多くの地域の人々に支えられてきました。子育ては地域づくりだと思うんです。だから少しでも地域の子どもたちのためにかかわりたい」と崎本さん。アップル文庫をつくることは、長年一緒に子育てグループ活動をしてきた友人の故・福田タカ子さん（二〇〇〇年七月に四十八歳で死去）との約束でもありました。「一度の人生だから、人との出会いは大切にしたい。文庫は彼女の生きた証しです」と崎本さんはいいます。文庫で出会う三歳のボーイフレンド、バウンドテニス仲間の小学生、中学生たちから元気をもらっています。「子どもは社会の宝ものです」という時の崎本さんの笑顔は母親の笑顔でした。

人と人とのつながりを大切にする崎本さんに、「いまのような世の中だからこそ、今度もどう

しても議会に送り出さなければ」と力強くあたたかい支援の輪が広がっています。

私も崎本さんを心から応援します

石原健三（旭東学区老人クラブ連合会会長）
池田トモ子（看護師 さくら苑リハビリセンター副施設長）
氏平三穂子(看護師・岡山医療生協看護部長ヘルパーステーション協議会会長)
梅若清芳（清芳会会主・梅若会）
太田垣弘枝（保健師）
小林登喜枝（主婦）
笏本愛子(助産師岡山協立病院レディース病棟師長)
嶽崎禮美子（社会福祉法人松風会理事長）
浪尾淑子（医師・岡山医療生協理事長）
藤田まり（学童保育指導員・岡山愛媛県人会員）
松田尚子(助産師・前岡大附属病院看護部長看護学校師)
村上真理子（アップル文庫）
持田千里（看護師・岡山協立病院看護部長）
湯原淳良（湯原内科医院院長）　（あいうえお順に紹介しました）